

# 漢訳經典における割注について (IV)

鈴木裕美

漢訳經典中に記載されている割注について、過去三回の発表を行ない、昨年は後漢時代支讖訳出經典以下菩提流支まで

一七一ヶ所の割注を提示した。(大藏經卷一〜卷四四)そして資料中割注の訳の記載形式が、すべて訳出当時の時代区分を示していることを指摘した。更にこの形式は、僧祐の『出三藏記集』、道宣の『統高僧伝』及び『大唐内典録』、贊寧等の『宋高僧伝』、智昇の『開元釈經錄』中において、訳經僧名の音写語についての訳の形式が酷似していることが判かった。つまり訳經僧の中国渡来当時の時代区分により僧名の訳がつけられているのである。

さて竺法護訳とされる割注のあった經典は十五經であるがこの中で『阿闍貴王女阿術達菩薩經』だけが、漢代となつて

- ・弘道広顯三昧經 (大15) 割注 阿耨達晋言無熱
- ・胞胎經 (大11) 割注 不注晋日觀
- ・阿闍貴王女阿術達菩薩經 (大12)

印度學佛教學研究第四十二卷第二号 平成六年三月

割注 阿術達漢言無愁憂

須羅陀漢言鮮潔辯

同經について『出三藏記集』卷第二(大558-1C)には、「別錄所載安錄先闕、旧録云阿術達女經、或云阿闍貴王女阿術達菩薩經」とある。つまり道安録では闕本となつていた經であることがわかる。

また常盤大定先生の『訳經総録』(六〇二頁)には、「道安録では、竺法護訳出經典は一五四部としてゐるが、僧祐は『出三藏記集』において一五九部とし、新たに四部の挿入を行った」とあり、四部の中に同經が記されているのである。

更に宇井伯寿先生の『釈道安研究』中、竺法護翻譯歴(年表一八九頁)には、同經の記述は見当らない。これは道安録において闕本となす經を僧祐が挿入した經であるので、訳出年月日が今日伝承されていないのは当然であろう。

次に同經の訳語を調査した。

陀隣(隣)尼 dhāraṇī

漚和（和） 拘舍羅 upā(ya)-kausalīya (kosalla)  
恒薩阿竭阿羅呵三耶三佛 tassagat(d) -  
arahāṣāmyasambut

阿耨多羅三耶三佛 anuttara-sāmya-sambut  
摩訶衍三跋致 mahāyān(a)-sāmpatti  
阿須倫 asura 摩尼珠 maniratna

右の訳語は音写語であるが、これは支識の訳語と一致するものを掲げた。（『訳経史研究』四七九頁 宇井伯寿）

この中で最も顕著な例として、竺法護は他の訳出經典中で anuttara-sāmya-sambut を無上正真之道、又は無上正真と訳しており、音写語ではない。紙数の関係上、一経中一ヶ所のみではあるが、竺法護訳出經典で、無上正真之道の訳語を次に示す。

。離垢施女經 悉見佛形。至後究竟。逮得無上正真之道。…略…  
令其中人吾等目見皆使究竟至於無上正真之道。（大12 90— a、太  
康十年十二月二日訳出 一八九九年）

。慧上菩薩問大善權經 志求聲聞緣覺。欲得無上正真之道為最上  
覺者。（大12 157— a、太康六年六月十七日訳出 一八五五年）

。如幻三昧經 諸愚騃子修業惡行。放生彼土逮成無上正真之道。  
（大12 135— b、太安二年五月十一日訳出 三〇三年）

。賢劫經 休解衆生遍入諸行。疾速無上正真之道成最正覺。（大  
14 2— a、永康元年七月二十一日訳出 三〇〇年）

以上示すとおり、anuttara-sāmya-sambut に関する限り『阿闍世王女阿術達菩薩經』と、他の竺法護訳出經典とは明らかに相異していることが判かる。

更に支識訳として確実なる経は、『道行般若經』及び『般若舟三昧經』であるが、この二経と割注のある經典『阿闍世王經』及び『佉真陀羅所問如来三昧經』と先きに示した音写語と一致するものを次にあげる。

。道行般若經（大8）

摩訶衍三跋致。佛説号如是。…略…爾故為摩訶衍那僧涅。摩訶衍三跋致。（427— c）

過去時恒薩阿竭阿羅呵三耶三佛。（429— a）

云何拘翼。恒薩阿竭阿羅呵三耶三佛薩芸若。…略…学得阿耨多羅

三耶三佛。（432— a）

菩薩摩訶薩漚想拘舍羅乃作是施。…略…極大施天中天。菩薩摩訶薩漚想拘舍羅。（439— c）

。般舟三昧經（大13）

悉入諸陀隣尼門。（903— c）

求摩訶衍三跋致。聞是三昧已欲守者。…：

（910— c）

時有佛名羅羅耶佛恒薩阿竭阿羅呵三耶三佛。於世間極尊。

（913— c）

。阿闍世王經（大15）

其身不離。以漏和拘舍羅教。(391—c)  
菩薩以逮得陀隣尼者。(397—b・他九ヶ所)

。侂真陀羅所問如來三昧經(大15)

來到是間。悉得陀隣尼法。(348—b)

不中道取証知生死以漏和拘舍羅而在中所見悉知其政道非教道。

(350—c)

以上示した音写語は、先きの『阿闍貫王女阿術達菩薩經』と一致することが確認できよう。

また無上正真之道について、割注のある支識訳『阿闍佛國經』には、同訳語が九六ヶ所で見られた。数が多かったので資料としては提示できなかったが、同経は道安が支識の訳に似ていると書き記した五経中の一経である。

以上調査したことは、割注の記載形式から端を発したものである。割注の記載者が一経ごとに訳出年代を調べ正確な目を以って記述したという前提のもとで考えるならば、『阿闍貫王女阿術達菩薩經』は漢代にすでに訳出された経ということになる。また訳語からみれば、竺法護の訳語とは相異し、むしろ支識の訳語が使われており、晋代に活躍した竺法護の訳出とは考えにくいのではなからうか。そして『阿闍佛國經』については、竺法護訳出経典で使われている無上正真之道という訳語が大量にみられるということから、これも支識訳出とするには疑問が残ると考えられる。いずれにせよ以

漢訳經典における割注について(鈴木)

上の二経は今後更に訳語等の詳細な検索が必要とする経である。

また他の例として康孟詳訳出とされる『中本起経』(大4)の割注には晋代とある。ところが同経は『出三藏記集』(大556—c)によれば、「中本起経二卷右一部凡二卷漢献帝建安中康孟詳訳出」とあり、割注の晋代とは一致しない。

割注 地地晋言宝称 須達晋言善温 瞿師羅晋言美言。

また音写語の訳をみると須達 *śuddata* は善温とある。この温は、あたたかい又は心や顔色などがおだやかでやさしいさまという意味があり、後代の訳である善施の施を意味しているとも考えられる。瞿師羅 *śhoshia* については一般に妙音、美音と訳しているが、美言とあるのは同経の割注の特色の一つであると思われる。以上のように同経についても訳者及び訳出年の再検討が必要であると考える。

本稿では、割注の記載内容と現在伝承されている訳者及び訳出年代の相異する例を示した。このように割注やその訳の新旧を比較検討することは訳者、訳出年代等を決定あるいは再確認する上で新しい方法の一つとして加えることが出来るのではないかと考える次第である。

今後もしこのような視点から研究を続ける次第であります。

〈キーワード〉 割注、音写語

(大正大学総合仏教研究所研究員)